日文　道徳の教授用資料

機関誌　どうとくのひろば

実践事例のご紹介など，日々の授業のヒントが満載です。

各種　リーフレット

１テーマで教科情報をお届けします。

バックナンバーは，日文Webサイトでもご覧いただけます。

～お知らせ～

深井先生による「ここが知りたい 小学校道徳科 15の疑問」は，５回に分けてお届けしています。
vol.4は，2019年８月に発行予定です。

これまでの疑問

1　ねらいの設定が不十分だと指摘されてしまいました。
2　教材は子どもに順番に読ませていますが，ダメでしょうか。
3　「どんな気持ちでしょう。」という発問では，深まらないんですが……。

4　グループで話し合わせても，自分の考えの紹介で終わってしまいます。
5　ワークシートや吹き出しを用意しても，書けない子どもがいます。
6　役割演技がハチャメチャになってしまいます。

ここが知りたい
小学校道徳科15の疑問　vol.3

日文　教授用資料
令和元年（2019年）６月28日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本資料は平成30年（2018年）度版小学校道徳科内容解説資料として扱われます。
本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33471

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690

日文 教授用資料

ここが知りたい 小学校道徳科 15の疑問

vol.3
疑問7～9

岡山市立大野小学校校長　深井　守

疑問7　板書に困っています。

疑問8　展開後段って，なぜ必要なのですか。

疑問9　今までの自分を振り返れない子どもが，とても多いのですが…。

本資料は，一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り，配布を許可されているものです。

日文の教科書情報
詳しくはWebへ！　日文　検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

疑問 7

板書に困っています。

私は，板書は好きな方です。黒板にチョークで文字を書くのは好きですし，自分で言うのは恥ずかしいのですが，割と字もきれいな方です。でも，道徳科の板書には困っています。子どもの発言を全部書いてあげたいのですが，たくさん発言すると書き切れません。後から見ても，とてもごちゃごちゃしていてわかりにくい板書になってしまっています。

そこで，教科書の指導書に載っている板書例を書き写しています。子どもはそんな発言をしていないのに，つい板書例のとおりに書いてしまうこともあります。一見して見栄えはよいのですが，私としては，全然しっくりしません。どうしたらよいのでしょうか。

道徳科で何をどのように板書するか，これは大きな問題です。「板書は子どもの思考を深める手がかりだ。」とか，「板書は構造化することが大切だ。」などと言われますが，何をどうすればよいのでしょうか。

1 子どもにわかる板書

いきなり「構造化する」とか，「思考を深める」などと構えないのがよいと思います。とりあえず，教材の内容が理解できるようにすることです。

まず，登場人物は誰なのか。もしわかっていれば，それぞれの名前や性格を板書に位置づけましょう。顔絵があるとよいですね。登場人物同士の関係がわかるともっとよいです。

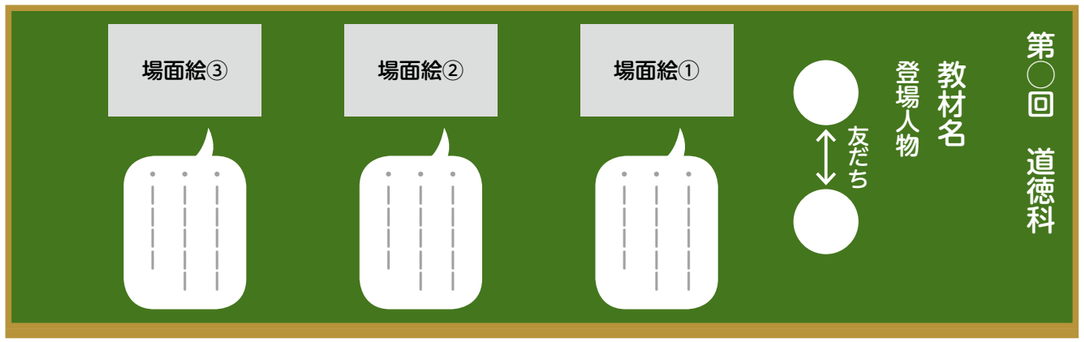
次に，教材の展開のだいたいがわかるようにしましょう。黒板の右端から時間軸に沿って，こうなって，こうなって，こうなるというような感じです。数としては，三つくらいが適当です。それぞれに場面絵があるとよいですね。

あとは，子どもの発言を位置づけるのですが，場面絵の下や横に吹き出しのような形で位置づけるとよいでしょう。

子どもの発言は，全てを板書する必要はありません。そうかといって，教師の都合で一部の発言しか取り上げないのはよくありません。子どもは「どうせ先生は，期待した答えしか黒板に書いてくれないのだな。」と思って発言しなくなります。発言したことを受け止めてもらえない道徳科って，そんなつまらないものはありません。

ですから，全ての子どもの発言を受け止めながら，キーワードを板書しましょう。例えば，「やめようかなあ。続けようかなあ。どうしようかなあ。」という発言があったとします。その際は，「どうしようかなあ。」と板書します。

それから，板書のタイミングですが，一人一人の発言をその都度板書するのではなく，ある程度の区切りごとに板書します。その方が，子どもの思考が途切れなくてよいからです。役割演技の際も，途中では板書しません。演技が終わってから，ゆっくり板書します。



でも，どの子どもがどんな発言をしたのか覚えきれないことがあります。そんな時は，メモをとったり，子どもに確認したりしましょう。「みなさんの発言を書きましたが，自分の発言がちゃんと書いてありますか。なかったら付け足しをしてくださいな。」という感じです。もし，自分の発言した言葉にこだわる子どもがいれば，それを認めて訂正や加筆をします。

とにかく，どんな子どものどんな発言も，きちんと受け止めることが大切です。

2 子どもの思考を整理する

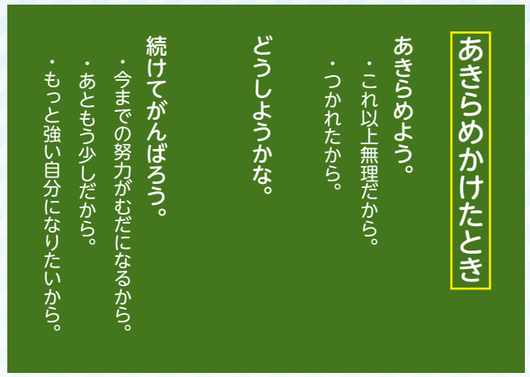
子どもの発言を順番に板書していると，書き切れなくなるのは当然です。道徳科にはその時間のねらいがあります。ねらいは教師の「明確な意図」でもあります。この時間に何について考え，何に気付かせたいかという明確な意図です。板書に「めあて」を位置づけるのも一つの方法です。

子どもの発言を全て羅列するのではなく，明確な意図に沿って，あらかじめ板書する位置を決めておき，子どもの思考を整理してやりましょう。

例えば，「A　希望と勇気，努力と強い意志」でよくあるのですが，めあてに向かって取り組んでる主人公が途中であきらめかける場面です。子どもは教材を読んで，ねばり強く続けるために大切な気持ちや考え方は何かを追求しているわけです。

板書では，右上のようになります。

子どもの発言を大きく三つに分けます。「あきらめる」のが右側。真ん中が「迷い」，左側に「続けてがんばる」を位置づけます。そして，それぞれの根拠を，その横に書きます。最初に「続けてがんばる」の発言が出ても，慌ててはいけません。右側を空けて板書していきます。



なぜ，「続けてがんばろう」が左側なのでしょう。それは，最後に達成してよかったという場面がその左側にきて，視覚的にそこへとつなげやすいからです。

3 工夫する

道徳科の板書は，縦書きか横書きかどちらがよいのでしょうか。教科書が縦書きですから，縦書きにする方が，子どもにとって違和感がなくてよいと思います。

また，上下段に分けるのも一つの方法です。例えば，二人の登場人物の考えを対比して示すのには，上下段に分けるとわかりやすいでしょう。

チョークの色は，基本的に白色を使います。強調したいときに黄色や赤色でサイドラインを引いたり，囲んだりします。矢印でつながりや変化を示すのもわかりやすくする工夫です。

板書は計画に沿いながら，子どもの発言を落ち着いて整理し，明確な意図をもって書きましょう。

いずれにしても，板書はシンプルでわかりやすいのがいちばんです。「構造化」を意識するあまり，複雑にしないようにしましょう。

疑問8 展開後段って，なぜ必要なのですか。

展開前段で話し合いが盛り上がると，ついつい時間が足りなくなってしまうことがよくあります。そんなときは，思い切って展開後段を省いています。授業の終わりのチャイムが鳴ってしまったら，子どもの集中力は途切れてしまいますし，無理に引っ張るのは子どものためにならないと思うからです。

展開前段でいろいろと話し合って，子どもが大切なことに気付いたのであれば，道徳科としては，もう十分にねらいに迫ったと思いますが，展開後段って，必要なのでしょうか。

残念なことに，そのように考えて同じようにしている教師は多いと思います。きっと展開後段の必要性をあまり意識していないからでしょう。

1 展開後段はなくてもよいのか

道徳科の目標は，道徳性を養うことです。そのための手段は，いくつかあります。問題意識をもつこと，自分のこととして考えること，多面的・多角的に考えること。そして，自分を見つめること。それらを通して自己の生き方についての考えを深めることです。

「展開後段がなくてよい」ということは，自分を見つめなくてよい，今までの自分を振り返ることは必要ないということです。私は，そこだけは譲れないと考えています。

道徳科ではどのように指導方法を工夫してもよいと考えています。いろいろな指導法にどんどんチャレンジしていただければよいと思います。ただし，道徳科で自分を見つめなくてもよいというわけにはいきません。そのためには，展開後段は絶対に必要なのです。

2 展開後段が必要なわけ

道徳科の授業の展開は，前段と後段で構成されています。前段は前段の，後段は後段のそれぞれの役割があります。

展開前段では，教材を読んで話し合います。そして，子どもは登場人物の行動やそれを支える気持ちや考えを探りながら，大切なことに気付いていきます。この気付きは，いわば自分を映す鏡を手にすることです。

展開後段で自分を見つめるということは，その鏡に自分を映すことです。それによって，自分に育ってきているものや足りないものが見えてきます。見えてくると，育ってきているものは，もっと伸ばそうと思うし，足りないものは，何とかしようと思うようになります。これがよりよく生きようとするエネルギーになるのです。

もし，展開後段をなくすのなら，せっかく自分を映す鏡があるのに，自分を映さずに終わってしまうということになります。とてももったいないことです。

また，わざわざ自分を見つめる場を設定しなくても，教材を読んで自分と重ね合わせながら考えているうちに，自然と自分を見つめる子どももいるという意見もあります。確かにそうかも知れません。けれども，学校教育では全ての子どもに自分を見つめる場を保障する必要があると考えます。「自分を見つめたい子はどうぞおやりなさい。主体性に任せますよ。」というのは，ちょっと無責任です。自分を見つめるというのは，何をどうすることなのかをきちんと指導しなければなりませんし，十分にその場を設定する必要があります。

3 自分を見つめるということ

一方で，自分を見つめるのは，反省ばかりになってよくないという意見もあります。足りないものばかりを強調するとそうでしょう。しかし，できるだけ育ってきているものに目を向けるようにしましょう。「いつもはできていないけど，あのときだけはできたな。」というように，できている自分を見つけることです。

また，行動としてできていなくても，気持ちや考えのレベルで成長している自分を見つけることも大切です。

例えば，「B　親切，思いやり」で，お年寄りに親切にしたことを振り返るとしましょう。電車やバスの中で席を譲ったこともないし，道案内をしたこともない。でも，「一度だけスーパーマーケットで荷物を持ってあげたことがある。」，あるいは，「今までは全然気にしなかったけど，この前，電車の中でお年寄りが立っているのを見ていると，しんどそうなので声をかけたい気持ちになった。」などが見つかります。自分を見つめることなしには，それも見つけようがありません。

もう一つ，配慮してほしいことがあります。「自分を見つめる」，「自分を振り返る」ということは，過去から現在までの自分を見つめる，振り返るということです。教師は，安易に未来を尋ねてはいけません。

例えば，「A　正直，誠実」の展開後段で，教師が「これからはどうしたいですか。」と未来を尋ねたとしましょう。子どもは，きっと「これからは，うそはつきません。いつも正直でいたいです。」と答えるでしょう。これは自分を見つめたことになるでしょうか。私はならないと思います。教師が安易に未来を尋ねると，子どもは教師の意図をくみとって，そんな答えをしてしまうのです。

それよりも，今までにうそをついてしまったことを思い出して，いつばれるかいつばれるかとドキドキした気持ちを振り返ることや，今までの自分の中に正直に言えてすっきりした経験を見つけ出すことの方に意味があるのです。ですから，展開後段で教師は，「今まで○○なことはありませんでしたか。そのとき，どんな気持ちでしたか。」と尋ねるべきでなのです。あくまで教師が尋ねるべきは，「これから」ではなく，「今まで」なのです。

ただし，教師が今までの自分を振り返りなさいと言っているのにもかかわらず，子どもが自ら未来の自分について，発言したり記述したりすることがあります。これはしめたものです。自分を見つめた後に出てきた，これからはこう考えてこうしたいというものこそ，本物です。自分を見つめることが，よりよく生きるエネルギーになる証拠です。

展開後段は，子どもが自分を見つめるために絶対に必要な時間です。そのことがよりよく生きようとするエネルギーになるからです。子どもの道徳性の成長を教師もいっしょに実感しましょう。

疑問9　今までの自分を振り返れないが，とても多いのですが……。

展開後段で「今までの自分を振り返ってみましょう。」と言うと，シーンとしてしまいます。時には，「えー。」という声も聞こえてきます。
口頭で尋ねても「そんなこと経験がありません。」「思い出せません。」という答えが返ってきます。「ノートに書いてごらん。」と促しても，鉛筆は止まったままで動きません。机間指導をすると，「何を書けばいいのですか。」「どう書けばいいのですか。」という質問ばかりです。今までの自分を振り返れない子どもが多いのですが，どうしたらよいでしょうか。

「自分を見つめる」，「今までの自分を振り返る」ということは，けっこう高度な思考力や表現力を必要とします。よい自分にもよくない自分にも向き合おうというのですから，そう簡単ではありません。でも，こつこつと積み重ねることによって，できるようになります。そのための手順や方法，教師の手立ての工夫について紹介しましょう。

1　はっきりとした視点をもつ

まず，自分を見つめるには，はっきりとした視点が必要です。その視点は，展開前段につくられます。「はっきりとした」というのがポイントです。

例えば，内容項目「B　親切，思いやり」の場合，「今まで人に親切にしたことがありますか。」というのでは，はっきりとした視点にはなりません。そういう経験はきっとあるので，振り返ることはできます。でも拡散してしまい，ねらいに迫ることはできません。教材を読んでも読まなくても，友達と話し合っても話し合わなくても，１年生でも６年生でも同じになってしまいます。

その学年，その教材に応じた，その学級ならではの振り返りの視点が「はっきりとした視点」です。

例えば，２年の教材「くりの　み」（B　親切，思いやり）で考えてみましょう。

展開前段で，困っている人に親切にすると相手も自分もとてもうれしい気持ちになること，親切にするにはちょっと自分が我慢しないといけないことなどが捉えられます。となると，振り返りのはっきりとした視点は，次のようになります。

<はっきりとした視点の例>
「今までに，困っている人に親切にして，自分もうれしくなったことがありますか。」
「今までに，ちょっと自分が我慢して，人に親切にしたことがありますか。」

このように，はっきりとした視点をもつことによって，子どもは，今までの自分を振り返りやすくなります。このことは，本時のねらいや教師の明確な意図とつながっています。

2　具体的な場面を想起する

振り返りのはっきりとした視点をもつことができたとしても，具体的な場面が思い浮かばなければ，今までの自分を振り返ることができません。

簡単なのは，「こんな場面に出合ったことはありませんか。」と言って，場面絵を数枚提示することです。日常よくありがちな場面を言葉だけではなく，画像で示すのです。

例えば，前述の「B　親切，思いやり」の場合は，こんな場面が考えられます。

・休み時間に外で遊んでいると，１年生が転んでケガをしているのを見かけた。
・一人で重そうに物を運んでいる人を見かけた。

そのうえで，「１年生にかまっていると遊ぶ時間が減っちゃうよね。」と自分のことを我慢しなければならないことを押さえます。そして，「保健室に連れて行ってあげた。」と子どもが発言したとすると，「どんなことを思って連れて行ったの。」と尋ねます。そうすると，「自分のことを我慢して困っている人のことを考えて親切にしたことがある自分」を見つけることができるのです。さらに，「１年生に『ありがとう』と言われてうれしかった。」などという発言があれば，すばらしい振り返りです。

また，２年の教材「なわとび」（A　希望と勇気，努力と強い意志）の場合，めあてに向かって取り組んでいる場面を絵で提示します。

・計算や漢字の練習に取り組んでいる場面。
・お手伝いのお風呂そうじに取り組んでいる場面。
・係の仕事として黒板をきれいに拭いている場面。

そのうえで，「うまくできなかったり，めんどうだったり，やめたくなったりすることあるよね。」と投げかけます。すると，「うん，うん，ある。」とうなずく子ども。「そんなときどうしたの。あきらめたの，続けたの。」と尋ねます。「がんばって続けた。」という返事がほとんど。「じゃあ，どんなことを思ってがんばったか，ノートに書いてごらん。」

このようにすると，ほとんどの子どもがはっきりとした視点をもって，今までの自分を振り返ることができるはずです。

3　一人一人に応じて

低学年だと，一つの具体的な場面を思い出して振り返るのが普通ですが，高学年になると，複数の場面で今までの自分を振り返り，自分の傾向性を見つめるということもできます。

例えば，「C　勤労，公共の精神」の場合，働く喜びを感じながらみんなのために働いていたかという視点で，いくつかの場面を振り返りました。すると，「ぼくは，人に見られているときは喜びを感じながら働いていますが，見られていないときはさぼっていることがあります。」と自分の傾向性に気付くこともあります。

それでも，「そんな経験ありません。」と言う子どもには，教師の日常観察から捉えた具体的な事実を提示しましょう。「先生はあのとき，○○さんがこんなことをしているのを見ていましたよ。」という感じです。これは，今までの自分を振り返りやすくするためだけでなく，「先生は，ぼくのことをよく見ているな。」という信頼にもつながります。

また，事前の活動として「親切にできたことをカードに書く」などということをしておくのも効果的です。今までの自分を振り返る際，そのカードを見ながら具体的な場面を見つけて，展開前段でもった視点に照らして振り返るというわけです。

今までの自分を振り返ることができるようにするためには，子どもに「はっきりとした視点」をもたせ，振り返りやすくする手立てを工夫することが大切です。そして，子どもが素直に振り返れたときには，そのことをしつかりと認め，励ましていきましょう。